

期待できる先生

2023.8.7

2011年、平成23年、9月20日には、中学校の初任者の授業を参観した。2年生の国語の授業だった。教材は古典だった。今回が4回目の研究授業ということだった。いい生徒たちだった。授業者が、いい授業をしたい、力をつけさせたいと思えるような生徒たちだった。

授業者の範読に続いて生徒が読んでいった。古典では、よく行われることである。ただ何となく読ませるのではなく、生徒に音読のねらいを知らせることが重要である。教科書を斜め45°に持たせたり、起立させたりして、読む姿勢をつくることも大切なことである。

音読にはバリエーションが必要である。1時間で何度も読ませる工夫があるといい。そのためには、音読の引き出しを増やしていかなければならない。速読、一文交替読み、原文と口語訳交互読み、チーム対抗から群読などである。起立させて音読していたのはよい。だが、読み終わった生徒から座らせると、遅い生徒は恥をかくことになる。例えば、〇分間読むとすれば、遅い生徒でも大丈夫である。指名して、上手な生徒に読ませていた。これは称賛の意味なのか。それならば、起立しての斉読のほうがよい。また、古典では、暗唱させることが多いが、暗唱のねらいをきちんと生徒に説明できなければならない。

今日のためてを板書し、赤枠で囲んでいた。ためてが、生徒にとっての課題になっているか、学習の必要性があるかという視点から、ためてを考えなければならない。生徒がためてを書いている間は、机間指導の1回目のチャンスとなる。この時間のためては、「～音読しよう。」だった。だが、音読していた時間は、数分間だった。

全9時間の指導計画だった。どこに重点を置くか、軽重をつけることも大切である。どうしても、授業者の説明で授業が進んでしまうため、節目節目で生徒に書かせることも必要である。2年生の古典は、1年生の復習をしながら、3年生の古典は、1・2年生の復習をしながら進めるとよい。

教材には、春、夏、秋、冬が出てくる。春をやってみせて、夏、秋、冬を生徒に任せるという方法がある。その際に、ヒントや方向性を示すとよい。ここが、2回目の机間指導のチャンスである。「ここまで大丈夫かな？」という授業者の言葉があった。不要である。生徒は、大丈夫ではなくても、そうは言わない。大丈夫かどうかは、授業者が生徒の様子を見て判断すればよい。

「季節感をどう思うか」という発問があった。3分でという指示だった。ここが、3回目の机間指導のチャンスである。「あはれ」と「をかし」の説明があった。桜の例がわかりやすかった。ある一定の授業はできる先生だった。今後は、“国語の授業”ができるようになってほしい。そのためには、教材研究ができなければならない。この参観授業は、時間通りに終わった。これは、なかなかむずかしいことである。

あの当ても期待できる先生だと思ったが、この授業者は、現在、地区の国語教員のリーダーの一人として活躍中である。うれしい。